

島村喜久治

院長日記



著者略歴

しまむら きくじ

1913年岡山市に生る。東大医学部卒。1916年清瀬病院長に就任、現在に至る。現在、日本結核病学会評議員、東京医学会評議員。

主な著書——「結核の正しい治し方」(あかね書房)「死を追いぬく日」(保龍同人社)「結核とのたたかい」(河出書房)「結核症候学」(保龍同人社)「結核の治療と新薬」(同)「結核の療養案内」(講談社)「結核の外科療法」(同)「結核の自宅療法」(同)「結核の回復期療法」(同)「結核の新しい療法」(中外医学社)「結核の事典」(筑摩書房)

院長日記

著者 島村喜久治

発行者 古田 晃
東京都文京区台町9

印刷者 磯島栄治郎
東京都墨田区吾妻橋2ノ15

昭和28年8月15日発行

発行所 株式会社 筑摩書房

定価 190円
地方売価 200円

東京都文京区台町9
電話小石川側 0051
2057
振替東京 165768

院長日記

島村喜久治



筑摩書房

装
幀

福
田
豊
四
郎

目次

赤松のみえる窓.....	七
屋食ぬきの十時間.....	一七
風雨にめげず.....	二八
二百本の白樺.....	三七
素朴な人間性.....	四三
私はヒューマニストではない.....	五五
戦いの日の来ることなかれ.....	六四
日本一の愛情をもつて.....	七三

残飯問題		八
二重人格時代		九
わが黒靴		一〇
ある曇つた日に		一一
三等普通列車		一二
尻ぬぐい役		一三
学会の前		一四
末端権力の唄		一五
ヒドラジド旋風		一六
俗吏の結論		一七

あれもこれも……………
一七六

非力なるもの……………
一八六

人はなぜ胃潰瘍になるか……………
一九六

尻すぼまりの終章……………
二〇六

あとがき……………
二二六

赤松のみえる窓

×月×日

院長室は本館の二階にあるので、南側の窓から、病棟の屋根屋根が、ずらりと二列に並んでみえる。病棟は、武蔵野特有の赤松林の間に建っているのもので、その赤い木肌が、松葉の、四季の緑とよく調和して、古い建物の間から頭をもたげている。

この松は、この本館が建つた頃は、まだ小さくて、二階建ての病棟の屋根の上にのぞいているのは、ほんの数本にすぎなかつた。戦争中の暗い時代で、やり切れない施療結核患者の待遇に、辞表をふところにして、朝から五時間、この院長室にすわりこんだことがあつた。

あのころは、窓の外は、一ぱいの青空で、東京府立清瀬病院の威厳をたたえた、黒光りのする屋根屋根をこえて、形のいい赤松が数本、ちようど、辞表をふところになっている私のように、せのびして、あせつていた。

そのころから、十年以上たつた。

今、だだつぱい院長室に一人で坐つて、火鉢に手をかざしながら、雪空の窓をながめると、

視野の半分はいていた赤松である。松喰い虫にやられた松もあるようだ。その松の梢の間から、瓦の色もあせ、樋もくさり落ちた、国立療養所清瀬病院の病棟がみえる。病棟の壁がはげたところもある。ガラスの代りにそりかえつたベニヤ板がはりつけてある窓もある。

五年前、復員して院長にまつり上げられた。その任ではないことは、百も承知していた。しかし、ほんとうをいうと、五年の間には、もつと腕がふるえるつもりであつた。

ふりかえつてみれば、五年の間は夢中であつた。患者用の食糧が翌日の朝までしかない日があつた。職員の俸給が払えない月があつた。出入りの魚屋に、支払いができなくて、魚が買えないときもあつた。看護婦が足りなくて手術を制限せねばならぬときもあつた。

時間とともに、そういう問題も、いつのまにか解決されて来たけれど、思い出してみると、顔から火の出るような無責任である。

今日も、月一回の清掃日なので、医務課長や庶務課長や婦長たちと一つしよに、病院中を巡回してみたが、窓や便所や洗面所など、こまごましたところを勘定すれば、数百カ所は修理を要する。先月、病院格付調査に来た都庁の係官も、全部修理したら、まあ、一千万円はかかるでしような、と笑つた。

戦災をうけた病棟が復旧できたのが、やつと去年の八月であつた。五年半のあいだ、瓦が落ち、天井のぶら下つたままだつた四つの病棟が、やつと、ペンキの香も新たに、病院中で、最も

きれいな病棟に復旧した。庶務課長と、全病棟がこのくらいになればいいんだが、と話しながら、巡回してゆくと、一番古い病棟は、中央廊下の部分でくさつて、どうみても、二階建のままずり下ちて、凹んでいる。ちょうど二十年たつた病棟である。

木造建築は、私用に使えば五十年でももつが、公共で使えば半分もたぬといふ。二十年もまえ、この病棟が建てられたときは、二十年もすれば日本の結核はなくなるだろうと考えられていたのだろうか。二十年のあいだに、二千人以上の患者を送り迎えただろうこの病棟も、その二千人以上の日本人の、みごとに公共性のために、二階ごと三寸もめりこむほど、くさらされてしまっている。

それから、炊事場がせまくて、患者九三〇人、看護婦一四〇人の給食は、とてもできませんと、栄養士が口をとがらせる。特別調理室でも作つていただいて、と栄養士は語をついで、患者さんの自炊を今年は禁止しなきゃいけないのじゃないでしょうか。

それから、洗濯場の洗濯器が一台こわれている。それから、研究室の冷蔵庫が一台、くさつている。それから——だから、私は、松ののびた院長室のながめに、心が暗れない。

×月×日

第十一病室の回診。外科病棟なので、みんな手術を受けたか、受ける予定の明るさである。

美校生の秋田君は、来月早々に手術にきまりました、と白いマスクの上の、目尻にしわをよせている。去年の九月の保健同人に書いた私の文章をよんで、わざわざ千葉からたずねて来た画学生である。

ある大病院で診てもらったが、休学して、郷里でいきのいい魚でもたべて、ぶらぶらしていなさいといわれていたという。それが、九月号に私が書いた青年画家の闘病の話をよんで、手紙をよこして来た。手術の相談であつた。レントゲン写真を送つてごらんなさいと返事を出したら、秋晴れの日に、お母さんがついて、白いルピシカを着て、秋田君がやつて来た。成形手術の、絶好の適応であつた。その場で、短期入院の手続きをしてもらつた。

もう一人、静岡県から来た横川さんは、気胸でどうにか片が付きそうであつた。この人のことは、去年出した「結核の正しい治し方」にもちよつと書いたが、静岡県のある保健所で診てもらっていた人である。月々うつしたレントゲン写真は、まるで異常がないのに、検査をすると、いつも結核菌が出た。保健所の医者が首をかしげた。

そしてついに、私には判らぬから、この写真を全部もつて、もつと詳しい検査のできるところへ行つてみてもらいなさい、といった。

お母さんが私をたずねて来られた。なるほど、十数枚のどの写真をみても、おかしいところが多かつた。あとは、気管支鏡検査とレントゲン断層撮影が残されているだけであつた。幸いに、

東京に親戚があつたので、思い切つての上京をすすめた。検査の結果、手術できるようなら、入院を引きましょう、と私は答えておいた。

気管支鏡は、医務課長の牧田君が外来でやつてくれた。異常がなかつた。ところが、断層撮影で、左の下、ちようと心臓の後に、小さな空洞が発見された。この人にも、短期入院の手續きをしてもらつた。最悪の場合は、左下葉の切除術ですよ、とはつきりいつておいた。

回診してゆくと、横川さんは、おじぎをしてうつむいてしまつた。受持ちの外科主任の赤木君が、とてとうまく気胸が入つて、肺の虚脱もいので、肺葉切除ももつたいないようで、もうすこし、気胸をつづけてみたいのですが、という。気胸で片付けば大もうけだと、私は横川さんに笑つて、それから赤木君に、左のフレニコ（横隔膜痺術）を加えたら、といつておいた。二十三日、未婚、はでな絵羽織で、横川さんはまた、おじぎをした。

女の患者さんは、院長回診だというと、肌着まで着かえるんですよ。ですから、先生の御都合で、回診が急に交つたりすると、とてもがっかりするそうです、と総婦長が笑つていた。

ところで、ペランダまであふれた患者を診ていたら、頭の上から、ひどくつめたい風が吹いてくる。ふりむいてみたら、天井のテックスが一枚なくなつていて、まっくらな大穴になつていた。

「これは寒いねえ。」

と私はいつた。

「え、これで、君は寒くないの？」

はあ、とその患者は苦笑して、

「寒いです。もう、去年の秋からたのんでいるのですが、まだなおしてもらえません。」

「君は知つてたの？」

と私は、ついている主任看護婦にきいてみた。

「はあ、営繕係の人に何度もいつたのですが。」

という返事であつた。

じようだんではない。テックスの一枚くらい。回診をすませるとすぐ、私は、営繕係に電話をかけた。へはあ、知つてはいるんですが、手がまわらなくて、つい——という返事であつた。

予算がなくてできないことは、私も、目をつぶる。しかし、誠意がなくてできないことは、がまがでさぬ。——へすぐやりましょうと電話の声であつた。

×月×日

先月、作業病棟から退院した矢口さんがやつて来た。

「平塚の細島さん親子はともいい人だったので、いい所をおせわしていただいたと思つて喜ん

でいます。」

と矢口さんはきれいな二重まぶたの目で笑った。

細島さんから手紙をもらつたのは、先月のはじめごろだつただろうか。封筒の裏をみたけれど、ぜんぜん心あたりのない人なので、また相談だろうと封を切つたら、子供と二人、結核でねているので、食事のせわにも困つているという書き出しで、部屋と食事をつけて月三千円さし上げるから、理解のある女の人の回復者を一人、紹介してもらえないかという手紙であつた。どんな女中を頼んでも、母子二人の結核なので、数日でいやがられて逃げられるという。

回復期患者を、常に七十数人かかえて、就職と住宅に弱りぬいている私にとつて、ほんとうの話なら、すばらしい話であつた。手紙をすぐ医事係長に廻して、信用できる話かどうかしらべて、信用できるようなら、作業病棟の女の患者から、希望者をつのつたら、とつけ加えておいた。

医事係の事務官が、自分でしらべに出かけて行つた。平塚海岸の暖かいところで、十七になる息子さんとお母さんが二人とも、大した病状ではないようだが、枕を並べて、気の毒で、そしていい人らしい、という報告であつた。私は、乗り気になつた。そして、矢口さんが選ばれたのであつた。

矢口さんは、三年近く入院していた、おとなしくて美しい娘さんである。左の成形手術ですつかり落ちついた結核は、もう、十分退院に耐えるので、医局会議で退院指示と決定していた人で

ある。

最近は、就職のために、近くの東京療養所の附屬の薫風園へ、『通勤』で英文タイプを習いに行ったりしていたが、別に、就職のあてもなかつたので、この話にとびついて来てくれたのであった。

五尺二寸くらいはあるだろうか、すらりと、矢口さんは院長室に入つて来て、何年ぶりに海の見える家で、人間の善意に包まれて、心あたかくくらししている、という。

そして、

「細島さんもととても喜んで下すつて、今まで方々の療養所をお願いしたけれど返事もいただけなかつたのに、清瀬病院からは、すぐ、病院の方がかけつけて下すつて、と涙をうかべていらつしやいましたわ」

という。

「あなたが幸福な『職場』にありつけて、こちらでお札をいいたいところですよ」

と私は笑つた。矢口さんは、いろいろ話をしたあげく、細島さんからと、何やら包んだものをむりやり置いて、逃げてしまつた。ワイシャツであつた。

そのあと、庶務課長が入つて来て、患者食費に三十万円赤字を出したので、厚生省に申請したいと言ふ。

「どうも、うつかりしていました」

と課長はあやまつたが、私は、治療費や食費や研究費に赤字を出す庶務課長はりつばだと思ふ。一日七十六円ばかりの食費で、結核患者の栄養を保とうというのが、むりなのだ。むりは患者の自炊となつてあらわれるか、食費の赤字となつてあらわれざるをえないだろう。ただ、いかなことは、わが病院においては、両方になつてあらわれたことである。しかし、三十万円といつたつて、四月以来十カ月間の赤字である。一カ月二百万円をこえる食費予算に対して、たつた三十万円の赤字である。

清瀬病院から地方の国立療養所に転院した患者たちが、清瀬病院は共産党の患者がうるさかつたけれど、食事はよかつたと口をそろえてくれている。

「三十万円はまづかつたねえ」

と私は庶務課長にいつたが、肚の底では、最もりつばな赤字の出し方だと考えていた。

当局反動だとか、国際独占資本の手先だとかののしられている私たち。それでも珍しく、今年の正月には、九百人の患者たちが、配給のもち米を、自発的に供出し合つて、病院へ感謝の大饅頭餅を作つてくれた。三十万円赤字のおわびの、百万べんの叩頭は、よろこんで、私が厚生省で演じて来よう。

ところで、この、国際独占資本の手先は、病院にいれば、三十万円の赤字くらいといつていら